



TITLE:

廣民族主義について - 資本主義と
民族主義との関係を中心として -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 廣民族主義について - 資本主義と民族主義との関係を中心
として -. 經濟論叢 1940, 51(4): 383-399

ISSUE DATE:

1940-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/131451>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷一十五第

月十年五十和昭

論叢

廣民族主義について……………

文學博士 高田保馬

法幣の「法定相場」「市場相場」及「商業相場」……………

十龜盛次

時論

金の將來……………

經濟學博士 飯島幡司

研究

保險に於ける個人……………

經濟學士 佐波宣平

國際カルテル序説……………

經濟學士 靜田均

國際貿易の概念……………

經濟學士 松井清

說苑

ハンス・フ・ライアー『二十世紀の歴史的自覺』……………

經濟學士 出口勇藏

社會集團に關するマイヤーの見解……………

經濟學士 大橋隆憲

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十一卷 第四號 (通算第百四號) 昭和十五年十月發行

論叢

廣民族主義について

——資本主義と民族主義との關係を中心として——

高田保馬

目次

- 一、民族主義と資本主義との本質に於ける相斥——二、民族主義と資本主義との相互手段化——
三、一方が他方を強めるといふ一時的事情はないか(民族主義と自給方針)——四、民族主義に於ける波動と廣民族主義の支配。

一

民族主義と資本主義との關係は決して單純なるものではない。一方の見方では、帝國主義が民族主義の延長であるし、他方の見方では帝國主義が資本主義の一段階である。さうすると、二者は帝國主義を共にその一面又は一段階としてもち得るほどに密接なる聯絡を有するものであり、いはゞ共通なるものをもつとも考へられる。と

廣民族主義について

第五十一卷 三八三 第四號

一

ところで、また民族主義は屢々資本の利潤獲得を排し、いはゞこれに代ふるに新しき經濟組織を以てしようとしてゐる。更に進みては資本主義的精神に徹するといはるる猶太人を放逐しようとする。さうするとの關係は本來如何なるものであるか。之を概括的に次の如くに表現し得るであらう。

民族主義の要求は究極するところ資本主義を斥ける、資本主義の要求は究極するところ民族主義に背く。此の如く二者は相容れざる性質をもつものであるが、ある特殊の事情の下に於て一方が他方を利用するといふ關係が成立する。そこで問題は究極に於ける排除の關係が何故に存立するか、又一方が他方を手段とするが如き事情は如何なる場合に存するかの諸點に存する。

茲にとるところの立場からすると、民族主義の要求が強化せらるるところ、それは帝國主義の段階に達せざるを得ぬ。ところが一派の主張からすると、帝國主義は資本主義の獨占的な段階に達したるものに外ならずとも見るべきである。さうすると、民族主義と資本主義とは相即せらるべきものではないか。答へていふ、全然さうではない。その理由は帝國主義が資本主義の一段階ではない點に存する。一體民族主義の本質は民族的自我の擴充要求に存する。此擴充要求はそれの外部への進展を意味する。民族主義の強化せらるるほど民族の成員はその目的の爲に奉仕すべき地位に置かれる。民族主義が外部から成員の上に強制せらるるところの規範たるに止まらず、その自發的な要求となるときに、成員は民族といふ全體の分枝となる。成員の自由によつて、其理性の要求に従つてかゝる行動に出づる限り、そこに個體が完成せらるるかに考へるにしても、其實全體に背き得るところに個性の原理が存する以上、民族主義の強化は結局個の吸収とならざるを得ぬ。然るに資本主義とは何である

か。それはあくまで個人の利潤の追求である、それが如何なる道德的な意義と使命とを有するにせよ、個人を中心とした立場であることは争ふべくもない。資本主義の徹底したる姿は毫厘の利益と雖も打算して失はざることである。従つて民族主義と資本主義とは全く對角線の兩極の如くに對立する。それゆゑに民族主義の強化は資本主義の排除の方向に進むであらう。即ち今日の如く國際對立の深刻にして民族主義の高調せらるる場合に於ては、資本主義の要求が民族を基礎とする國家の利益を助長する限りに於て認められ、然らざる限りを骨子をなすところの利潤の追求が抑壓せられる。現にかゝる目的のための統制は愈々進行せざるを得ぬ。寧ろ進みて國家社會主義的方向に進むのではないかと考へられる。此點からいへば民族主義の高調、従つて帝國主義化の方針が資本主義の排除従つて社會主義化の方針と結合することあつても、決して不思議とすべきことではない。かくて所謂社會帝國主義又は帝國主義的社會主義といふことは形容矛盾の如くに見ゆるけれども、其實社會のめざしてゐる一方向であると思ふはならぬ。例へば今のナチスの向はうとしてゐるところが、種々なる見方を容る餘地はあるにしても結局に於てそれであらう。かつて大戰當時の英吉利の眼ざしてゐた方向がそれであるとも考へられる。

これに對して資本主義の強化はいづこに進む性質をもつであらうか。前述の如くそれはあくまで理知の打算であり、個人の利潤の追求であるから、それに徹する限り、民族の意識は背後にひそまざるを得ぬ。ことに近代資本主義の赴くところを見よ。それは大規模の生産技術の發達に伴ふ、かゝる技術の發達は自ら生活の理知化を促す。利潤の追求自體が個人を營利機械の地位に追ひこまうとすることはいふまでもない。資本主義の發達と共に

生活水準が高まり、自ら個人主義化せしむることも記憶すべき事態であらう。何れにせよ資本主義的精神の徹底は個人の利潤追求の自律化である。之を追求する爲に追求するとともに、國家又は民族の拘束からあくまで自由であらうとすることである。資本に國境なしといふことは資本投下の自由なる情勢を示すものであるが、同時にまた資本家自體その利潤追求に於て特定の民族乃至國家に依存せざることを示す。猶太人は其短期資本の利用に於て最も敏感に安全なる國家を選ぶといふ。資本の非民族性は同時に資本家自身が民族をこゆる傾向あることを示す。資本家自身その立場に徹する限り、國境をこえる可能性がある。此點からいふと、民族主義が資本主義を排除する傾向の存するが如く、資本主義が民族主義を稀薄にしようとする傾向がある。社會の廣大なる層についても亦次の如くに云ひうるであらう。資本主義社會に於て支配的地位を占むるところの資本家の層がかかる精神を支持する限り、此精神は自ら被支配層に流下せざるを得ざるに至るであらう。従つて民族の各部分に於て強弱の程度の差異はあれ、之をあげて民族主義の方向から遠ざかるに至るべき性質をもつといふべきであらう。

二

帝國主義とは何であるか、それはかつて述べたるが如く外部への空間的擴充を求むるところの、従つて武裝したる民族主義である。資本主義そのものが本來民族主義と相斥ける性質のものである以上は帝國主義が資本主義そのものであるわけではない。帝國主義と資本主義との結合の如何に必然的ならざるものであるかは、今ソ聯の帝國主義を見るだけでも明白のことである。勿論これは本質的聯關についていふことであるから、時々の現象としては二者の結合を見るとこがなはいへぬ。それは主として、他を手段として利用する場合に於て然りである

と考へられる。即ち資本主義と帝國主義とが相利用し相手段化することはある。けれどもそれは民族主義と資本主義の相利用するといふ廣汎なる場合の特殊に過ぎぬであらう。

歐洲近代の歴史に於て、民族國家統一の機運は何によつて助長せられたか。これは當時成長の途上にあつた資本主義が統一的なる市場を求めようとして國民經濟の確立を實現せしめたのであるといふ。これをそのまゝ承認し得べしとするならば、資本主義がその發展の手段として民族國家の完成従つてその段階に於ける民族主義の實現を求めたといふことになる。けれども此民族主義の手段化は決して此段階に止まることはないであらう。所謂經濟的帝國主義學說の主張根據となつてゐる諸事實といへども、若し之を承認するとするならば、やはり同様の意義を有するものである。資本主義が所謂金融資本の段階に達してから其資本投下の方向を開拓し、利潤率の低下を防止するが爲に、國家權力と結び帝國主義的政策に出でるといはれてゐるが、此際國家權力を單に利潤獲得の目的の爲に發動せしめるといふことはあり得ざることであらう。國家權力自體の要求が外部への擴充に存せざるとき、利潤追求の要求が之をその方向に驅りたて得るといふことは考へがたいと云はねばならぬ。たゞ民族主義的要求が外部への伸展を求むるときに於て、資本主義がそれを利用し、これによつて資本の輸出乃至市場の獲得を實現するといふことはある。従つて此場合資本主義の要求自體がそのまゝ帝國主義となつて作用するのではない。資本主義がその伸展を策する爲に、帝國主義的従つて民族主義的行動を一の政策として利用したるまでである。而もこの手段を自ら作り上げるのではなく、それ自體として存立する方針を自己の利益の爲に利用するまでである。屢々帝國主義は其負擔を償ひ得るかといふことが問題にせられる。今までの事實として帝國主義政策

實行の負擔、例へば植民地開發の費用、土民統治の出費等がそれに對する報酬を本國に對して與へ得るものであるかの明ならざる場合がある。この場合、帝國主義が資本主義の延長たるに過ぎず、又單にその手段に過ぎざるものならば、帝國主義の方針は拋棄せらるゝか、又は阻止せられざるを得ないであらう。けれども、本來民族主義はそれ自體として帝國主義的行動としてあらはれ、資本主義が之を利用しようとするに止まるならば、それだけの報酬あるか、ペイするか如何といふことは、全然實際の上に變更を來さすにすむわけである。

資本主義が民族主義を手段とするばかりではない。また民族主義も資本主義を手段化する。これはたゞ次の事情による。民族主義の實現のためには、それが民族國家完成の段階にあると、又は帝國主義の爛熟せる段階にあるとを問はず、一國家の物質上の繁榮ことに富の増進を必要とする。それは社會が大規模生産の爲に資本主義以外の生産組織を知らず、又はそれ以外の組織をとりこむことの困難なる場合に於てすべてさうである。日本の明治維新以來の資本主義産業の保護助長は一に國家自衛の目的を目ざすものであつた。また、近年戰時體制に入りこむに當つて所謂軍財抱合の政策が主張せらるゝに至つたことも、軍需の急速なる調達がやはり利潤を與へて生産を擴張せしむる以外に其方法なしと見られたからである。此種の例は數限りもないことであらう。資本主義の發達が著しく國家の保護に負ふことは、何れの國に於ても一般に認めらるゝ事象である。けれどもこのことも民族主義と資本主義との間に不可離なる聯絡があり前者は必ず後者と結びつくといふ意味のものではない。前者はたゞ一の手段として後者を利用するに止まる。それゆゑにナチスの政策の如きは、民族主義を純粹に貫き通さんが爲に、從つて民族に奉仕せしめるが爲に、利潤追求の努力、資本主義精神の發動を極端に抑壓してゐる。加之

民族主義の目的に副ふところの他の經濟組織があると認めらるゝや、資本主義組織そのものはすてらるることなしとせぬ。それゆゑに、民族主義は資本主義をたゞ其時の事情に於て有利なる一手段として利用する。

此の如く、民族主義と資本主義とは相利用する關係に立つとはいふものゝ、二の利用の仕方は何れが重きを占むるのであるか。これは一概に答へがたい。たゞ一般的に見て、資本主義の發達なほ幼稚なる段階に於ては、民族主義の資本主義を利用しそれによつて自衛進みては、外部進展の目的を達成しようとする。資本主義の發達更に進めば資本の勢力増大してその目的の爲に民族主義ことに帝國主義の形をとれるところの民族伸長の要求を手段化する。いはゞ國家權力の作用によつて外部への進出を容易にしようとする。はじめの段階に於ては資本主義がむしろ受動的的地位に立ち國家は自己の目的達成のためにその助長を計らうとする。之に反して、資本主義の發展高度に進める場合に於ては、それがむしろ國家權力を利用しようとする立場に立ち、外部への進展をもとむる民族主義的要求を強化して、其利潤増加を計らうとする。云はゞ資本主義自體がはじめ受動的にして後能動的に轉ずるのは、資本主義の勢力の消長を物語る。近代民族主義の自衛的段階にあつて資本主義經濟がなほ十分なる發達を遂げず、資本といふものが未だ微力であり、國家は其自強の目的の爲にこれが助長を講ぜざるを得なかつた。然るに、資本主義發達の高き段階にあつては資本の勢力が社會の如何なるものよりも優越せる地位を占める、そこでそれは如何なるものをも其利用に供し自己の増大を計らうとする。民族主義的傾向がその利用するところとならざるを得ぬ。これ屢々資本主義の一段階が帝國主義そのものであると誤り稱せらるゝ所以である。たゞ資本の勢力こゝに及べばそれはもはやかつての段階に於けるが如く、國家の微力なる手先ではなくなる。國家

自體の利益従つて民族主義の要求そのものが抑壓せられようとする。二者が本來相容れ得ずといふ本質的關係がこゝにはじめて、現實の上に展開せられて来る。

三

資本主義と民族主義とは本質に於て互に斥くる傾向をもつものゝ、互に手段化するといふことだけが二者の關係のすべてであらうか。更に第三の關係の考へ得らるゝのではないか。即ち本質的に斥くるとはいへ、種々なる事情ことに現代的條件によつて、一方が他方を強化するといふことは考へられないか。

本來民族主義は共同社會的なるものである。共同社會を地盤とする道義であるとともに情熱である。資本主義は利益社會の側面に外ならずその格別に強化せられたる一面である。いはゞ全體社會に存する利益社會的の要素が極めて純粹に近き表現をとれるものである。一方はあくまで求心的であり、他方は遠心的である。一方にあつては自我が全體の中に没入するとともに、全體なる自我によつてみたされようとする、他方にあつては自我があくまで優越と支配とを求めようとするが、たゞその手段に於て資本の増殖利潤の獲得といふ平和的方法をとるに過ぎぬ。此二者が其本質に於て相斥くるものがあるといふのは明白のことであると思ふ。けれども一面に於て一方が他方を手段とするに止まらず、その精神を助長することはないか、資本主義の發達によつて民族主義そのものが一層の強さに追ひこまれることはないか。これについては何人も近代的戰爭の深刻さと規模の擴大とを考へるであらう。この史上未曾有の事實は資本主義が民族主義そのものを深刻ならしめたる結果ではないかと考へるであらう。けれどもこれについてまづ考ふべきことは資本主義の高度に近きものゝすべてが帝國主義的であ

るのではなく、従つて戦争を求むるものとは見えざることである。北歐の諸國別して瑞典の如き白耳義和蘭の如き經濟の發達に於て決して低き段階にありとはいひがたきにせよ、平和的な國是を支持しつゝあつたといふべきであらう。ことに瑞典の如きは云ふに足る武力を有せずとはいへ、經濟の發達は高度に達し國民は軍備の重き負擔を免れてゐるから、極めて高き生活を享受しつゝありといふ。資本主義的勢力が國家權力により利權乃至資源の擴大を容易に實現し得る見込の立つ場合には之を利用するにしても、さうでない限り、寧ろ平和的方向に向つて進むといふことはこれらの例によつて認められよう。これは資本主義の中にそれが民族主義を強化するといふ傾向の内在し得ざることを示すものではないか。然らば資本主義の高度化につれて戦争の激化し國際對立の深刻化したる事實はこれを如何に見るべきであらうか。これ一は經濟の事情に負ひ、一は社會の事情に負ふ。産業の發達愈々高度に達するに及び、社會の民衆の生活は生産能力の愈々小なる部分によりてみたさるゝことが出来る。それだけの生産力の餘裕は一方種々なる文化的設備を高めることにもむけらるゝが、他方軍備の充實にむけられる。即ち經濟の上昇は餘剰の増加を來し、此増加は愈々莫大なる物資が戦争にむけられ得ることを意味する。此點からいふと、産業の發達は民衆の生活を高むる爲によりも殺戮の武器を増加する爲に役立つたと見るべきであらう。最近に入るほど一國の經濟に於ける財政の重さは増加し財政に於ける軍事費の重さは増加する。このことは生産力の増加につれてその増分が如何なる用途にむけられたかを物語る。戦争の規模が擴大せられその慘禍が増加したといふのは、まさしくかゝる事情による。それは決して民族主義自體が資本主義によつて強烈さを加へて來たといふことを意味するのではないと思ふ。

此の如く近代戦争の大規模化は經濟的事情に負ふにしても、國際對立のはげしさは資本主義そのものの結果ではないか。これについては周知の如く次の如き解釋乃至説明が與へられてゐる。市場と資源との獲得の爲に植民地の分割が行はれた。けれども今はその餘されたところはない、勢ひその争奪が行はれざるを得ぬ。國際對立の激化は大戦以前にあつても、また今日にあつても一にこの資本の事情にもとづくものである。けれども此見解は國際關係の重點を經濟の上に置きすぎたのではないか。歐洲大戦が資本主義の結果としてではなく民族主義の結果として見らるべきことは幾たびか述べたところであるから、こゝにくりかへさぬ。たゞ最近の對立的狀態の深刻さはどこから來てゐるか。

これには勿論歐洲大戦の結果に關する雜多の事情があらう。それを全く離れて考へる。各國の市場が封鎖せられ自給的組織が打ちたてられて來た。それによつて國際的對立が深刻になつたといふ、これは誤りではない。けれども、市場の封鎖そのものは何によつて來るか。各資本家自身の立場からいふならば、如何なる場合にも市場の擴大が要求せらるゝであらう。然るにそれを封鎖すること自體が民族主義の結果ではないか。勿論資本主義の段階が高度に達し、不況がそれによつて深刻になつた以上、此深刻さが自給的傾向を強化したといひ得るであらう。それによつて國際對立が激烈になつたといひうるであらう。それにしてもこれは資本主義が民族主義自體を強化したといふわけではない。民族主義によつて作られたる經濟的な對立を通して、民族主義の表現が深刻さを増したに止まるのではないか。

けれども、社會的事情を忘れまいと思ふ。近代的民族國家の形成、次に民族自決主義、此二の結果として歐洲

にはあまりに多くの國家が出現した。而も資本主義の發達、物質文明の進歩は距離を克服し、彼等の間の交通を容易ならしめた。其結果、相互の交渉は頻繁となり複雑となつた。さうなるにつれて、利害の衝突、摩擦の機會は多く、而も更に高き權威の之を調節する實力をもたざる以上、對立は深酷とならざるを得ぬ。加之、各小國は各孤立して自足性をもち得るほどのものではない。たえず、種々なる勢力への依存によつて自己を維持しようとする。而も此依存が決して永續的なるを得ず、勢力均衡の狀況によつて變化し、變化するところ安定よりも危機を生み、對立を刺激する。要するに、廣大なる組織を要求し、それによつてのみ完全なる統一を維持しうであらう諸民族の分立は、交通が容易となり稠密となるほど對立を深酷ならしめる。而して此高次なる統一が新なる廣範圍の國家として確立せらるゝことを要求しつゝある。對立は統一的組織を作るべきものが之を作らざることによる一種の制裁とも考へられる。

四

けれども民族主義が資本主義そのものによつて、何等の變容を受くることはないか。二者は本來相斥くる性質をもちながら、互に手段とするといふだけでは云ひ盡されぬものがある。ことに顯著なることがらは、資本主義によつて與へらるゝ民族主義の變容である。その一は民族主義の波動的進行であり、その二は民族主義の擴大化である。

すべてのものが一張一弛の波動をなして進むが如く民族主義とてもなほ然り。資本主義の發達過程の中にあつても、民族主義は幾たびか其緊張と弛緩とを経験した。何人も知るところの事實としては近年の國際對立の強化

に伴ふその高揚であるが、それに先だちては自由主義と國際平和の要求との時期がある。更に溯ればまた國家の統制が強化せられ、民族の要求が強く外面にあらはれてゐたといはるゝ重商主義の時期がある。多くの人々はこれを説明するに専ら資本主義發達の段階を以てする。例へば獨占資本主義に伴ふ國內販路と海外市場との縮小によつて最近の對立従つて民族主義の強化を説明しようとし、海外市場の開拓どこまでも進行し得る事情にあり、國內に於て利潤獲得の對象である非資本主義的外圍の存在亦その方向に作用することにより、資本の進展に向つて障礙の乏しかつたことが自由主義の支配、民族主義の後退を來したものであるとなし、進みては重商主義の方針をもかゝる動機によつて説明しようとする。けれども、かゝる見解の如く、民族主義が或は生れ或は亡びるのではない。自由主義の時代にあつても民族主義は決して消滅するのではない。たゞそれが波動の一段階をもち、その低調なる表現をもつ段階が自由主義的色彩を示すのではない。經濟的事情の作用を完全に否定しようとするのではない、たゞそれが民族主義をしてかゝる波動を示すに至らしむる事情であると見るのである。民族主義そのものは民族の生活そのものに根ざす。その母胎が失はれざる以上、それが經濟の事情によつて生滅するのではない。たゞその緊張と弛緩との歩調乃至波浪的變化が、經濟従つて資本主義の事情に負ふ所あると見るべきであらう。

更に一步を進めて考へる。此經濟の干涉はどれだけのものであらうか。此民族主義の波動に對して社會的なる即ち結合的な事情はどれだけの作用を及ぼしたであらうか。私にはかうより考へ得られぬ。強力なる國家が國際場裡に支配的地位を確立してゐるときに、民族主義は表面に強調せらるゝことがない。それはすべてに自由を

許すとしても、即ち國內的には成員に、國際的には各國に自由を與へても、すべての秩序はそのまゝに維持せられる。ところが新興の勢力と既存の勢力とが相拮抗し其間の摩擦が重大なる意義をもつことになる、國際間には對立が深刻となり、國內の統制が強化せられる。現代の國家自給主義を以て重商主義の新しき形に於ける復活であると見るものがある。對立と統制の強化の一面のみを捉へるとまことに然り。然らば何がかゝる復活を必然ならしめたか。それはたゞ國際關係に於て群雄の角逐、ことに新勢力の勃興か又は優越的地位を占むるものゝ安泰かといふ、社會學的事情ではなかつたか。此點からいふと、私は決して經濟の影響を否定するものではない。従つて資本主義が民族主義の波動に作用せずともいはぬ。けれども此波動は實に深いところにかゝる社會學的原因を藏するのではない。而して此社會學的側面にある事情といふものは勢力一般の側に存する交代張弛の原則、いは、弱者の勝利の原則である。

けれども此波動よりも重要視したいのは、民族自體の擴大である。資本主義は一面から見ると機械の利用の進歩でありすべてのものゝ規模の増大である。愈々大規模なる機械の利用せらるゝとともに、文化のあらゆる範圍に互つて協働や組織の擴大が要求せられる。例へば大規模の生産は其生産の組織に於ても、又生産物の需要に於ても益々多くの人々を協働接觸の中にもち來さざるを得ぬ。これの最も直接なる表現は、近代に於ける戰爭規模の擴大であり、國防單位の擴大である。近代的裝備は益々大規模なる戰鬪單位を必要とし、此規模に達せざるものを没落せしめる。このことは自ら、一の民族をしてその本來的なる狹少の範圍の中にとちこもる封鎖的な態度をとることを困難ならしめる。けれどもこれは決して軍事に於ける現象たるに止まらぬ。文化のあらゆる範圍

にあつて大規模ならざるものは微力となり、微力なるものは前進することを得ず、生活の全面に於て弱者たらしむを得ぬ。かゝる事情は國民生活の全般に亘つて協働互助の範圍の擴大を要求するに至るであらう。而して資本主義の進展に伴ふ交通の發達がまた同一の方向に作用する。交通の發達は何よりも廣き範圍の人々の接觸を頻繁にし、從つて其間に於ける理解を高め同化を強くする。それが協働の範圍の擴張そのものを著しく容易にするわけである。これらの事情から来る民族主義自體の變容は如何なるものであるか。民族主義が其狭き固有の限界に於て自ら固執しようとする限り、結局民族の存續發展といふ其目的を達成することは出来ぬ。云はゞ民族主義が其固有の姿に於て終始しようとする限りそれは民族主義そのものゝ自殺とならざるを得ぬ。このことは、民族主義が漸次にその主體に於ける擴大を餘儀なくせらるゝであらう。民族結束の紐帶に於て、その強さ又は共通の程度といふものを弱めてゆくと、民族的性質を有すれども、なほ結合の緩き、而して廣き範圍が自らを一の主體とすることが考へられる。若し舊來の固有の限界を守る民族を固有の乃至舊き民族主義といふならばこれを新民族主義又は廣民族主義いとふことが出来るであらう。此點からいふと民族主義は廣民族主義に向つて進む宿命をもつてゐる。

勿論歴史の進行は其論理を進むのに相當の年月を要する。從つて現在の狭き意義の民族主義が此廣民族主義に進むまでには相當の年月を要するであらう、けれども、來るべきものはいづれ來らざるを得ぬ。勿論それへの道程にも二の場合が考へられ、またその内容にも幾つかの、少くも二の型が考へられる。まづそれへの道程について考へよう。最も確實なる道は戰爭である。民族的に極めて接近せるものの間に行はれるところの戰爭が其一方の勝利に終るときには、今の國際情勢を前提とする以上、武力を以て戰敗國を戰勝國の協働者となし、これらを廣民族主義を以て連結しようとする。今の獨逸が北歐民族主義を主張しようとするのは其一例である。或は共

同の敵をもつところの幾つかの民族、而も血縁に於て文化に於ていはゞ民族的に近き立場にある若干の民族が相結束する、組織によつて相結ばるるのみならず、進みて廣民族的自我によつて結ばるるに至る（たとへば英米の結合）。これらはともに戦争を一の促進機會とするものである。他の道程は平和的なものである。交通の容易となるにつれて接觸は頻繁となるとともに、文化の交流と利害の連結は密接となり、遂に弱少の國家を形づくる民族が自ら強大なる國家への依存を強くするとともに、同類の意識によつて結びつけらるるに至る。これの純粹なる場合は將來にのみ期待しうべきことと思はれる。

此廣民族主義の内容について見るに、それには種々なるものがあらう。何れにせよ、民族よりも廣き範圍の民族的結合の自我擴充の要求である點にはかほりがないといふものの、舊き民族的團結にどれだけの重點を置くかによつて種々なるものである。一方の極端にあつては、廣民族主義の成立するとともに、狭き民族の民族主義は極めて稀薄なるものとなる。而も他方の極端にあつては、前者の成立にも拘はらず、なほ後者が支配的な意義をもちつゞける。此差異は廣き民族の範圍に包まるゝ狹義の諸民族の間に如何なる程度の差異の存するかといふこと、及び周圍の狀況がどこまで此廣民族の結束を必要とするかといふことに依存する。勿論社會の發達の大勢からいふと、此廣民族主義は世界のあらゆる範圍に亘つて、而してあらゆる民族を動かしてゆくであらう。これは前に述べたるが如く資本主義の發達に伴ふ必然の大勢である。けれども、此廣民族主義が果して單一の國家組織をもつに至るか、然らずしてそれは國家といふ組織によつて支持せらるるに至らざるものか、これはあらゆる具體的條件によつて定まるといふ外はない。

ナチスの理論家ロオゼンベルクは一九四〇年七月九日内外新聞記者團を前にして北歐運命共同體といふ講演を行つた。その要旨として傳へらるるものは次の如くである。『北歐のゲルマン民族は打つて一九となつて政治經濟的共同戰線を形成すべき必然

的運命の下に置かれてゐる。是等各民族の利益實現は全歐洲大陸の金體的強化をもたらすのである。かく北歐地域の各民族が大獨逸結合を遂げることは歐洲最大の革命といふべく、我等は一千年の後今や始めて全ゲルマン地域が一個の共通の運命の下に立ち、我がゲルマン民族發祥地の防衛に當らんとしてゐる事實を銘記せねばならぬ。『所謂獨逸的支配の下に於ける平和が廣域經濟乃至地域共同體の方向に進むであらうことは略ぼ豫想せられてゐたが、これは著しくかゝる豫想を裏切つたといふ。茲に引用したる主張は大團結したるゲルマン民族はいはゞ廣ゲルマン民族としての北歐民族を歐洲の支配者たらしめんとするものである。たゞ後きところによると、此講演は北歐の諸民族に對する呼びかけの役目をもつてゐたが、それらに於ける反響に於て考慮すべきものあるを認め、しばらく引きこめる事になつてゐるといふ。たゞ歴史の方針がそこに向へる事だけは疑ひがたい事である。

私のいふ東亞民族主義もまた、此廣民族主義の一例である。私はこれを昭和十二年末から主張しつゞけてゐる。その骨子に於てはロオゼンベルクの目ざしてゐるものと異なるところはない。たゞそれに三年を先じたといひ得ないであらうか。獨逸が地域主義に出るとのみ見られてゐるのは、民族主義的擴張の方向、即ち政治的活動の方針と民族主義自體の側とを、即ち民族主義の客體の側と主體の側とを混同するものである。獨逸は政治的に地域を要求する。けれども主體に於ける結束の原理は之を今や廣民族的なるものに求めつゝある。なほ私の東亞民族主義はいふまでもなく、南方（蘭印佛印の如き）の諸民族を含むものであつた。たゞ眼前の問題として滿洲國と支那とを取り上げたのである。

ナチスの向ふところを根據として地域主義を主張し、私の廣民族主義を斥けようとしたる論者は極めて多かつたが（而して東亞協同體論者の多くはさうであつた）、今ナチスの理論がいつこに向ひつゝあるかを知るべきである。更に進んで英米の關係は何を豫示しつゝあるか。歐米兩洲に跨るアングロサクソンが相合して、一の廣民族主義的行動に出でんとすることを示すのではないか。序にいふ。此廣民族主義といふ言葉はかつて私が（若干の他の學者とともに）超民族主義とよべるものであるが、この表現は誤解を招き易い。大地域經濟が廣域經濟として表現せらるるのに従つて、廣民族主義といふ言葉を用ひたのである。

此點からいふと過去の世紀は狭き民族主義の時代であつた。それによつてはじめて民族の統一と民族國家の形成とが完成せられたのである。而してその際、かゝる廣民族主義は未だ成立することがなかつた。國家をこゑ民族をこゑたるものを考ふる必要あるときには直に抽象的な人類又は世界が考へられた。けれども資本主義の進行とともに社會學的なる事情、即ち結合と分離とを支配するところの事情は、全く一變した。今や狹義の民族主

1) 高田、東亞民族論、39頁。
2) 同書、42頁。

義を固守しそのみに頼ることは、民族を亡ぼす所以である。此意味に於て今日に於ける支那の民族主義は僅に孫文の時代に適應せるものに過ぎなかつた。廣民族主義の裏づけをもたぬ民族主義は今や過去の遺物に過ぎぬ。此意味に於て三民主義といへども改鑄せられねばならぬであらう。狭き民族主義はヴェルサイユ條約以來民族自決主義として作用した。けれどもその現状は如何。今日單一の民族を以て完全に自衛の道をすゝみ得るものはいづこにもないと思はれる。支那の民族主義は歐洲のそれらの影響によつて確立せられたと思はるるが、その歐洲に於ける民族主義は愈々變貌しつゝあるのではないか。

勿論民族自體が封鎖性をもつ如く、民族主義はつねに封鎖的要求をもつものである。たゞ新なる必要と地盤とが此封鎖の殻をやぶつて進む。物質文明の進歩に伴ふ距離の短縮がすべてを大規模化し、従つて民族をして此封鎖性の一角を開放せざるを得ざらしめる。此解放によつて成立するものは廣民族主義である。勿論これは早晚何等かの政治的組織をもつものとなる。組織が擴大し民族が擴大する。一面からいふと、基礎社會の擴大といふ歴史の壯嚴なる進行の一節に外ならぬ。かくて、廣民族主義は現代の宿命である。人は動もすればこれをブロック經濟と聯絡つけ、又はこれと同一視するかも知れぬが、それは根本から誤りである。ブロック經濟はブロックに結びつけらるるもの手段化であり、被搾取者の束縛である。廣民族主義は結束するものの民族的結束である。支那の民族主義が獨力によつて完成し得られざる現實を前にして歐米の勢力の救援を仰ぐにしても、白人の民族主義が異種族に何を以てのぞんだかを考へねばならぬと思ふ。

此廣民族主義の見解は決して今の東亞の狀態、獨逸の制覇から思ひついたものではない。これは私が二十五年以前に述べてゐる『基礎社會の擴大縮小の法則』からの一系論に外ならぬ。私は『社會學原理』に於て之を述べ『社會學概論』に於て説明を若干組織的なものとなしたが、『東亞民族論』に於てそれからの結論をひき出した。